粗チンのフミトが
人妻たちとの大乱交で
成長した巨大なペ〇スを
ビンビンに勃起させる
水泳部のメンバーたちに
嫉妬

〇校１年生のフミトのペニスは粗品でいつも委縮がち。
これまでごまかしてあまり深くまで考えてこなかったが、フミトには不思議で仕方ないことがあった。
それは水泳部の先輩をはじめ、他のメンバーたちとの歴然とした差、だ。

フミトは自分なりに部活を頑張っているつもりでいる。
そう自分に言い聞かせている。
だけど・・・・・。

キビキビと泳ぐメンバーたちの姿。
肉体に満ち溢れるエネルギーが違う。
何か違う・・・。
そして何より気になるのが、その股間だ。
まるで硬式野球ボールでも入っているかのように、メンバーたちの股間は揃いに揃って膨れ上がっている。
泳ぎだからまだ良いが、走るとなれば窮屈すぎてもはや邪魔になりそうだと心配になるくらいの大きさだ。

フミトは羨ましかった。

そして、極めつけはいつも部活終わりの更衣室・・・・。

「よぉしっ！！今日もしっかり泳いだな！」
「あぁ！良い練習になったよ！！」
爽やかな声を掛け合う部員たち。
かいた汗はいつもの練習場所である若干塩素の混じった校舎横の室内プールの水に混じり、爽やかな水滴となって部員たちの全身についている。
「２週間後の大会も間近だからお前らも気を引き締めていけよ！」
リーダーの先輩がメンバーに発破をかける。
「ＯＫ！！頑張ります！」
後輩たちは元気に答える。
リーダーは当然、同じ更衣室で着替えているフミトにも声をかけている。
もちろんフミトの耳に届いてはいた。

だけど・・・・・。

そんな言葉よりもフミトは先輩たちの“下半身”に意識がいっていた。

ズルッ・・・・。

“ビィィーーーンッッ！ビィンッ！ビィンッ！ビィンッ！”

先輩たちが制服に着替えるべく競泳水着をずり下げたと同時に、窮屈な水着の中からとんでもない大きさの圧倒的巨根が顔を出し、しかもそれは１００パーセントの勃起状態！！！
これ以上の元気さは物理的にあり得ないくらい、真上を向いてビクンビクンとヒクついているのだ。

フミトはこの瞬間が来るたび、メンバーたちに決して気付かれないようにうつむきながら上目遣いでうらやましげにそれを眺めるのだったが・・・・不思議で仕方ないのだった。

どうしてここまで先輩たちのチンポはたくましいのだろう？

俺だって同じ水泳部で頑張っている学生なのに？？

自分とは何が違うのだろう？？？

・・・・フミトには分かるはずもないのだった。

フミトは何も知らなすぎたのだ。

“生殖器は、使わなければ萎えていく一方”

“使わなければ成長しない”

そこに決定的な答えが隠されていた・・・。

「うはぁっ！！んっ！んっ！！あああぁぁぁぁっ！」
「ズチュッ！！ブチュッ！！パンパンパンッッ！！ズチュズチュッ！！パンパンッ！！」
「あぁぁっ！！おばさぁんっ！！あぁぁぁあ！きもじ・・・いいよぉぉおおお！！」

体験版はここまでです